

生地商と日本のモノ作り

「運命共同体、という関係に変化なし」

生地商にとって国内産地、国内染工場は「運命共同体」と言える存在。適時適品を供給する際に、日本のモノ作り機能は欠かせない。主要生地商トップに、日本のモノ作りに対する提言を聞いた。



澤村 常務
清水 民生氏

トリコットが主力である当社は北陸産地との関係性が深く、国内産地との関係は密接であると言えます。

世界的に見て、トリコットは単品量産の世界なのですが、北陸のトリコットのニッターでは多品種小ロット化が進んでおり、他国にはない機能を持っていきます。開発力という意味でも、北陸のトリコットは世界に冠たる存在でしょう。

トリコットは世界に冠たる存在

重要です。トリコットは加工して化粧することによって大きく化ける素材です。この点が海外に対する優位性であり、当社でも以前から、提携する染工場に社員を研修に行かせるなど、品質管理、商品開発に力を入れています。

当社は海外での生産にも力を入れています。海外では作ることもありますが、海外では作ることもない素材は多い。今後も北陸を筆頭に、日本の産地とは関係性を強めていきます。

産地は情報収集にもっと力を注ぐべきだと思います。海外に打って出ることは難しいとしても、情報を収集し、開発力を高めてほしい。また、日本の市場では通用しなくなった技術が海外市場では必要とされるようなケースもありますので、そうした場合に限り、海外への技術移転も検討すべから、提携する染工場に社員を研修で行かせるなど、品質管理、商品開発に力を入れています。

あとは、適度な設備投資も不可欠な要素です。このままだと、設備の停滞が成長を妨げることになってしまいます。